

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



2004年 4月号 / 250円

編集部より	2
真理に仕える道を歩くための要素	3
こわれた壺「タウヒードとシルクのバランス」	4
「神秘」	8
無益なものを放棄することはイスラームの良さの一つである 第3回	10
「こどもたちへ」	11
聖クルアーンと科学「色の言語」	12
ドゥア（祈り）のある毎日へ	13
預言者ムハンマドを語る「預言者たちの風格…正直であること」	14
リサーレイヌール「人間と世界の本質(第2回)」	15
「新しいお稽古事から学んだ「動作の意味を推し量る事」の大切さ」	18
レスピコーナー ユムルタル・エキメツキ（卵揚げパン）	19
「創造の生きがい 4つの創造(第2回)」	20
「礼拝直前の準備について」	23
心のうた 「民の心」	25
詳しく学んでみましょう 『礼拝(サラート) 第3回』	26
「サハーバ(預言者の教友)物語」より「二人の者に対するみ使いの批評」	27
「ムハンマド」イスラームの源流をたずねて」b y 小杉泰 を読んで	28



春爛漫。整然と手入れされ庭先を彩る色とりどりの花も、道端に咲く可憐な野の花も鮮やかに目を惹きつけます。命を吹き込まれたかのような大地や草木の匂いがそよ風によって鼻先をくすぐります。

三寒四温を繰り返しながらやってくる春は、桜の開花によって一気にほとぼしり出ます。今年、東京などでは気象庁の観測史上2番目に早い開花宣言となりましたが、その後の冷え込みや天候不順もあいまって、花は長持ちしているようです。

日本人にとって桜ほど特別な意味を持つ植物もありません。開花を待ちわびる間の、気温変化を敏感に感じながらつぼみの膨らみ具合に目をやる毎日。開花宣言を聞いたときの「やった!」というような高揚感。カレンダー上の予定を睨みつつ天気予報に目をやりながら、少しでも長く花が咲き続けますようにと願う折にも通じる想い。風に乱舞する花びらに圧倒されながらその潔さと儚さに胸を打たれる瞬間、などなど……。年度始まりの時期とも重なるため、新しい門出にちなんだ桜の思い出も多くあるでしょう。

普段は自然に無頓着な人でも、この時ばかりは五感を総動員して日一日と過ごしていることと思います。桜は刻一刻と変化し、昼と夜で表情も違えば一日たりとも同じ姿を留めません。花や立ち姿の美しさもさることながら、私たちはその変化によって目を奪われ、その時々で多くを感じ学ばされていることがあるのかもしれませんが。きっと自然や、さらには生きているものすべてが、日々このような感動的な変化を遂げているのでしょう。ただ私たちが気付かないだけ、感じようとしていないだけかもしれません。

これからは緑の美しい季節へと移行していきます。陽気も良くなり、外で過ごすのがますます気持ち良くなりそうです。さあ、自然に秘められたメッセージを探しに出かけましょう。

お詫び

小誌先月号(2004年3月号)表紙絵の部分で引用したクルアーンの中で、「アッラー」とすべきところを「アッター」とする間違いがありました。また「ドゥア(祈り)のある毎日へ」のコーナーでも「真の」という漢字の読み仮名が誤っていました。謹んで訂正いたします。

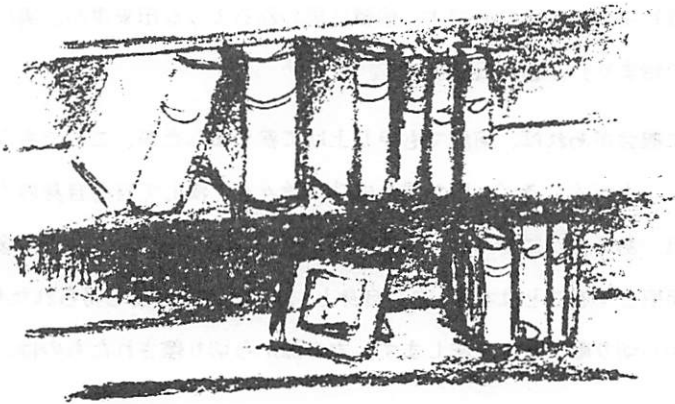


真理に仕える道を歩くための要素

この世的な欲望、もしくは動物的な欲求に優先させて神聖な動機・理由を好んで選ぶこと。一旦真実を発見したなら、そのためにはできる限り俗世のあれこれを犠牲にし、忠実であり続けること。未来の世代の幸福を願い、あらゆる困難にも耐え忍ぶこと。物質的であれ精神的であれ快樂のために幸福を追求するのではなく、他人の幸せや安らぎに喜びを求めること。地位や良い境遇を求めないこと。他人より自分自身が仕事を引き受けることを好み、一方で自分よりも他人が報酬を受け取ることをよしとすること。－これらは真理に仕えようとする神聖な道において必要不可欠な要素です。

この道において先導的役割を果たす人は、後に続く人々にとっての良い手本とならなければなりません。道徳的な善良さや美点といった長所が見習われるのと同時に、悪い態度や不適切な行為も後輩たちの中に消し去ることのできない痕跡として残されるからです。

真理のいかなる局面であれ人々に示そうとする人は、誠実さ、信頼性、義務を負っているという意識、高度の認識力、状況把握、先見性、そして完全な高潔さをもってそれを体現するよう努めるべきです。高い地位にありながら、先に述べたような徳のうち一つかそれ以上欠けているような場合、その分だけ重大な欠点があるように見受けられることを肝に銘じるべきです。これは後に続く者にとっては明らかな不幸となるのです。





「タウヒード（神の唯一性）と

シルク（神と同列に他の何かを置くこと）のバランス

時々、自分にもどうにもならないことですが、自分の意志に反してあることが頭にひっかかり、「私達は無駄骨をおっているのではないだろうか？」と独り言を呟きます。

私はイーマーン（信仰）とクルアーンに奉仕することを人生の目的としている方々に対しずっと希望があると申し続けて参りました。私の身近にいらっしゃる方々から、はるか彼方、遠い地域で活躍なさっている方々に、いつの日か、成人、子どもを問わず、必ずや預言者（彼に平安と祝福あれ、以下S）の慣習（スンナ）に賛同し、みなそろって預言者（S）に従うだろうと確信を持って伝えてきました。預言者（S）の慣習（スンナ）を知った方々は、息絶えるまで、燃え盛る情熱と共に、生きぬくであろうこと、そして預言者（S）に従い、聖典に明示された真髄を守りぬくであろうことを（申し上げてきました）・・・しかしながら、心にあることが引っかかり、形のみイスラームを生き、彼の魂にも近づくことができず、その本質に達する事のできない多くの方々をまわりで見る度に、私の希望の灯火も燃え尽きてしまうような気がしています。このテーマに関して行われた試みが何の効果も、益も見出せないとするたびに、私は打ちひしがれ、「もしかしたら、主はディーーン（宗教）へ奉仕する事を私達にはお望みではあられないのではなからうか？」と自問自答いたします。彼のディーーンへ奉仕する事は、恐らく私たちにとって、妥当ではないのかもしれませんが、それに奉仕するためにふさわしくなるよう努める事、そして、それを守ることが私たちの義務（役目）です。そうなのです、些細に思われるような出来事が、実は私には気がかりなのです。それが「腐敗の始まり」と感じるからです。

何時も毎日のように機会があれば、何度でも申し上げて参りましたが、ここでもう一度繰り返したいと存じます。何方であれ、人が成し遂げ、勝ち得た成功の数々を、決して自分自身の力（手柄）とみなしてはいけません。これは、あきらかにシルク（多信崇拝、自分自身を信仰することも多信仰の一種）です。人がこれらを自分の手柄とすることは本来、自分自身と、成し遂げられ勝ち得られた事柄を、真の力から、つまりその力の根源から切り離す事を意味します。力の源から切り離されたものは、次に、自分自身の力

「昔々ユーフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがいました。壊れたつぼで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がいました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったのですが、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。（HPからの転載）

を地面に苗木のように植え付けようとはしますが、その地面をふき抜ける夏の強風は（真の力から切り離された）人間の力を成長させることはできません。それらはただ、「アッラー以外の何者も、権能も力も持ち給わぬ。」という強い夏風の威力によってのみ、背を伸ばし、成長する事ができます。人間の力の介入が見せかけの表面的なものである場合、その夏風の力は、見せかけの人間の力から救い出してくれます。ですから、決して「私が」と思っはなりません。「私がやった」と仰っははいけません。アッラーの御力によって、成し遂げられた出来事の数々を、個々人が占有する事があっはなりません。もしこの種の考えが不意に頭に浮かんできてしまった時にはすぐにアッラーにお赦しをこいねがきましょう。「アッラーよ、あらゆる行動を起こし、成し遂げ給うのは貴方です。私はそれを私自身が行ったかのように、一瞬考えました。一群の雲が私の脳裏を霞め、私はこのために（自分自身を崇拝する）シルクに走ってしまいました。もし貴方がこの事を多信崇拝と見なすとおっしゃるならば私は瞬間にムシュリク（多信崇拝する輩）と化しました。どうか、私をお守り下さい。アッラーフンマ インニー アウーズ ビカ ミンアン ウシュリカ ビカ シャイアン ワ アナ アアラム ワ アスタグフィルカ ビマー ラー アアラム。（アッラーよ、知りつつ、多信崇拝に走る事から、私は貴方に加護を求めます。そして、私が知らずに行った多信崇拝に対して私は貴方に赦しをこいねがいます。）

そうです、成功の数々は、成し遂げられた事柄を個々人の自我自讃に結びつける事によって、壊され、曇らされ、色あせ、埃まみれになってしまう事を、私は存じております。そして、これらの事はたいいてい（大魚を獲る）モリのように私の心に突き刺さり、「嗚呼、アッラーよ、何が語られ、何が為されているのでしょうか？」と、私は問いかけます。アッラーの唯一性を語り、その道を示す時に、もしや、シルクに入ってしまったのではないかという不安を私は脳裏から取り去る事ができません。

アッラーの成功を各々の自我に関連付ける捉え方は、高貴なる天使達や、我らが長である預言者（S）そして偉大なアッラーの友たちの魂を悲しませているように私には感じられます。私のような未熟な者でさえも多信崇拝への不安のため一晩眠れぬ夜を過ごし、自我の欲望や利己主義的考え方、そして奢りと見せかけによって、不安や不快を感じます。そうであるなら、アッラーにすべてを任せ、アッラーの存在ゆえに自我を消滅させ、アッラーのうちにすべてを見、すべてを知る方々は、多信崇拝と不信仰を嫌うと同時に、成功を自我のものとする事にも嫌悪感を示します。アッラーの命に従い、アッラーへの愛と想いを持ちつづける者の嫌悪するふるまいが、（時がたったからといって、）よいとみなされることは決してありません。

現代を生きる方々は、通常の私たちの文化とあまりにも相違がみられる生き方をなさっていますので、これらの事をご説明する事は難しいですが、本来、トルコの民衆は歴史的にイスラーム文化やイスラーム信仰、イスラーム的な風習や慣習に逆行する事には抵抗を示してきた民です。しかしながら、現代の方々は同化することを望んでいるように私には見えます。中国やルーマニアや日本に行った方が、5-6ヶ月
2004年4月 やすらぎ

後に、ムスリムとしてのアイデンティティーを失い、中国の方や、ルーマニアの方そして日本の方に同化した形で、あなたの目の前にあらわれます。

しかしながら、とらわれを持つ人間は、正しい道を歩む自由な方々のように、真にイスラームのために人々に尽くすことはできません。とらわれが多ければ多いほど、貴方がたの自由も、同じように貴方がたの手から逃げ去ってしまうのです。ムウミン（善き信仰者）はなにものにも囚われることはありません、いえ、囚われるべきではありません。飲食のように自然の必然的要求においても、囚われることはありません。食するのは、必要最低限生命を保つためにだけです。

家族は人間にとって、必要不可欠なものです。その家族の妻にとって夫、あるいは夫にとっての妻はなくてはならないかけがえのない人生の友です。来世への旅路の道連れです。時には道を歩み進む時私達はクッバ（ドーム型の屋根の石のように、うでをくみ、肩を寄せ合いながらお互いに頼りあいます。とは申しても、私達は家族中心主義者ではありません。もしそうであるなら、人は従属（とらわれ）によりアッラーの御望みになる行動や活動ができなくなることもあります。

とらわれ（従属）とは本来、魂に生じる弱さを示すものです。それは心のむなしさです。人は実のところ妻や夫であったとしても、又母親や父親であったとしても、（これらの人間的関係には尊敬をはらいますが同時に）とらわれずに、それらから完全に自由であると示す事も必要です。『私はただアッラーのしもべです。』と言いきる事が必要です。アッラーのしもべは、アッラーのご命令と禁止の他、何事からも束縛を受ける事はありません。

これらはすべて私達のイスラーム文化が示すものです。その文化圏外にいらっしゃる時、他の文化に同化するのであれば、さらに相違のみられる場所においては、より多くの変化が生じる可能性があります。というのは、ある種の変化を生じた者は、他の面でも変化していきますから。同化と言うのは、特定の文化への束縛、その束縛に縛られる事を意味します。束縛される人々は自由ではなく、とらわれる人となるでしょう。アッラー以外の何かに捕われるのであれば、完璧なアッラーのしもべとなる事は不可能です。

これらの事は私が最近見聞きした事から、感じた事です。時々私の心臓に血が一脈一脈流れこむように、したり、しみこんでいきます。時には針のように私の心を刺します。このような状態に、影響に、見真似に、光景に、アッラーを口先だけで唱える事に、心ない音に、そして音にあらわれる口論に、私は大変不安を抱いております。「みんな素晴らしい、わたしは取るに足らぬ者。みんなは小麦、わたしは麦藁。」と言う考えが、私の原則です。とは申し上げるものの、再び取るに足らぬ事柄にひっかかってしまうこともあります。もし私達がムスリムとして生きているとするならば、アッラーの御望みになられる生き方（イスラームの生き方）を貫くべきだと私は考えます。

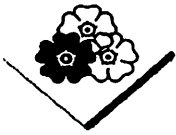
そうです。「あなたがたの財産と子女とは一つの試みであり」クルアーン 8章 28節

この世で、この試みに負けて失う母親達や父親達、そして子女達がみられます。一方で、勝ち得る母親達や父親達、そして子女達がいらっしゃいます。試みに勝ち得る集団、損失する集団、又勝ち得るムジャーヒド（神の道で奮闘努力する者）、損失するムジャーヒド、勝ち得るムハージル（神の道を歩むべく移住する者）、損失するムハージルがいらっしゃいます。

1つ1つがアッラーからの試みです。変化について申し上げるなら、もし私達に変化するとするならば、精神世界の階梯を昇っていくたびにおいて、向上する方々のように変わるべきでしょう。私達にとってこれ以外、良き変化はありえません、いえ、あってはなりません。これ以外の変化は退行を意味します。クルアーンの中のご説明にあるように、「タザブ（フ？）ズブ」です。あちらこちら戻る事、変わる事はムナーフィク（偽善者）的な振る舞いです。人は一度変わるべきですが、その後は、変化のひとつひとつがアッラーに近づくために為されなければなりません。「私の首にかけられた首輪の持ち主はアッラーであられ、私はアッラーのみに固く結びつく彼のしもべです」と心に明記すべきでしょう。価値あることは、すべてこのことに（アッラーに固く結びつく、アッラーのしもべであること）に基づきます。

そうです、時は最終の時代。顕われることはそのしるし。お助け下さい、我が主よ！





私は動植物の生態や自然に関する TV 番組を見るのが好きだ。それらをみていると、生きものの習性について、またこの世界が実にバランスよく創られていることの不思議さを感じる。

人間の体のしくみもまた然りである。消化器、呼吸器、循環器などそれぞれに相関関係があり、その精巧なつくりと働きは見事なまでに驚異的だ。

最近、妊娠、出産、育児を通して、つくづく人間の体はよく創られているな、まさに神秘だと感じる。特に女性はこれらの体験を通して、実際に体が変化していくので、この神秘を実感しやすいと思う。

例えば、妊娠するとつわりが起き、嗅覚が敏感になり、食べ物の好みが変わったりする。しだいにお腹が大きくなり、胎動を感じると、確実にお腹の中で命が育っている喜びを実感する。そして子への慈しみの気持ちがうまれてくる。妊娠末期には大きいお腹で膀胱が圧迫されるので夜中に何度もトイレに起きるようになるが、それすらも、赤ちゃんが生まれてから授乳で夜中に起きることが苦にならないようにと、体が赤ちゃんとの生活に適応するための準備でもあるのかな、と感じたりもする。

出産後しばらくすると母乳が出てくるようになるが、それも自らの意志で出てくるのではなく、ホルモンの働きで自然に出るような体のしくみになっている。初乳は山吹色のようにあざやかな黄色だ。それもこの時期に必要な栄養や免疫物質が豊富に含まれているようで、特別な意味もあるらしい。日がたつにつれて色はだんだん白くなっていくが、砂糖を入れているわけでもないのに、母乳はほの

かに甘い、そして赤ちゃんが飲みやすい温度であたたかい。何で甘いのかな、と不思議に感じる。そして赤ちゃんが必要な期間が終わると、母乳も出なくなる。

赤ちゃんが泣くと、おっぱいも張ってくるから不思議だ。片方のおっぱいを飲ませると、もう片方からもツツツとおっぱいがあふれてくる。赤ちゃんとの関わりの中で、母親は赤ちゃんが何で泣いているのか、お腹がすいているのか、おむつか、寂しいのか、眠いのか、を泣き声で判断できるようになってくる。

赤ちゃんは生まれてすぐに、誰に教えられるのもなく、息をし、おっぱいに吸い付く。生きていくための最低限必要な能力は生まれながらにして持っている。そしてこの世界には人間が生きていくために必要とするものの全てが用意されている。

しかしながら、赤ちゃんは世話をしてくれる人がいなければ自らの力では生きていけない。それを考えると、やはり、一番はじめに創られた人間は、アダムとイブのような成人した男女だったんだな、と思う。そうでなければ(少なくとも新生児ならば)生きることも、子孫を残すこともできないだろう。

人間の体の構造は人間がつくったロボットや機械とは比べものにならないほど精密、精巧に創られている。どれほど科学が進歩したところで、人間が何の媒介もなく生命そのものをつくることはできない。

生命を考えると、そこには神秘を感じる。人間の

力をはるかに超えたもの、そして、人間やこの世界の全てを支配しておられる御方の存在に思いをはせることができる。

アッラーフ アクバル！！そして アルハムドリッラー！！

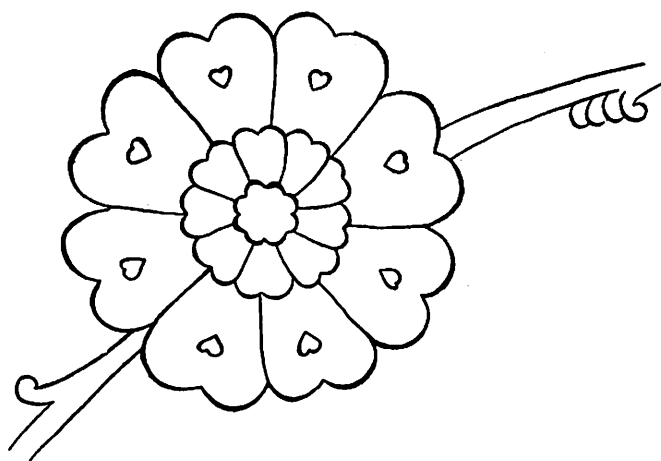
・(かれこそは) 天と地の創造者である。かれが一事を決められ、それに「有れ。」と仰せになれば、即ち有るのである。知識のない者たちは、「アッラーは、何故わたしたちに話しかけられず、また印を下されないのだろう。」と言う。以前にもかれらのように言う者がいた。かれらの心は同じようなものである。しっかりした信仰を持つ人びとには、われは種々の印を既に明示している。(雌牛章 2/117~118)

・かれらは言う。「何故かれに、主から印が下され

ないのであろうか。」言ってやるがよい。「アッラーは、確かに印を下す御力を持っておられる。だがかれらの多くは、理解しないのである。」地上の生きとし生けるものも、双翼で飛ぶ鳥も、あなたがたのように共同体の同類でないものはない。(家畜章 6/37~38)

・地上には信心深い者たちへの種々の印があり、またあなたがた自身の中にもある。それでもあなたがたは見ようとししないのか。(撒き散らすもの章 51/20~21)

・ジンと人間を創ったのはわれに任せさせるため。われはかれらにどんな糧も求めず、また扶養されることも求めない。本当にアッラーこそは、糧を授けられる御方、堅固なる偉力の主であられる。(撒き散らすもの章 51/56~58)





「無益なものを放棄することはイスラームの良さの一つである」： 第3回

ハディースの移住に関する部分には先に少々触れたのでそれで十分とする事にして、預言者ムハンマドのそれ以外の輝かしいお言葉に移ろう。そのお方は言われる。

「無益なものを放棄することは、ムスリムにとってイスラームの良さの一つである」^{vii}

常にアッラーと向き合っているという意識とまじめさ

文の最初にある〔ミン〕の文字は、境界線を引くということの意味している。これによってムスリムが、常にアッラーと向き合っているという意識に到達するための道が示されているのである。それは、不注意さ、無益なものにこだわることを放棄することである。まじめさを獲得し、不必要なものに関わることを放棄せずして、人がこのイフサンの意識に到達することは不可能である。

天使ジブリールと預言者ムハンマドの間答において、イフサンの段階は最終段階であるとされている。ムハンマドを訪れたジブリールは、まず信仰を、そしてイスラームを尋ねられた。それらに対する預言者の返事を承認された後「イフサンとは何か？」と、イフサンについても尋ねられた。預言者は「イフサンとは、アッラーを見ているかのように、アッラーにしもべとして従うことです。あなたがアッラーを見ることができなくても、アッラーはあなたを見ておられるのです」(*)と答えられたのであった。

この段階に到達するのは、アッラーをこの上もなく恐れること、この世的なものを放棄し、信仰行為を行い、アッラーに愛されようとすることによって可能となる。人はまずこの点に達することを理想とし、目的とするべきである。それから、この段階へ到るための道の一つ一つ試してみるべきである。

アッラーは、人間にとって、脛動脈よりも近い存在であられる。ある詩人がうたっているように、

「アッラーを外で探し求めていたが、心の中に、命よりも近いことに気づいた」他の詩人も詠っている。

「覆いの後ろから知らせを待っていたが覆いを取り払われて私は私を見た」

人は、アッラーの偉大なる手で動かされている。何もかも、アッラーが知り給うところにより成り立っているのである。アッラーを外で探し求めることは徒勞である。なぜならアッラーは人間にとって、彼自身よりもなお近いところにおられるからである。このことが明らかになるのが、イフサンである。

^{vii} Tirmidhi, Zuhd 11; Ibn Maja, Fitan 12

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

7つの天と大地、またその間にある凡てのものは、かれを讃える。何ものも、かれを讃えて唱念しないものはない。だがあなたがたは、それらが如何に唱念しているかを理解しない。本当にかれは忍耐強く寛容であられる。(17章44節)

私は77歳になってから、アッラーを信じる心をアッラーからおくりものとしていただきました。わたしは、びょうきのため、ねたきりで、手足や体の他の器官(きかん)もじゆうにうごきません。わたしがアッラーをしんじる心をえることができたのは、ほんとうにしあわせなことです。わたしはときどきかんがえます。なぜわたしは生きていたのだろうか？おいしゃさんやかんごふさんたちは私のいたみを少しでも少なくしようとさいぜんをつくしてくれています。また私をねがいたりさせたり、みずをくれたり、せわをしてくれるひとたちも、わたしがすこしでもかいてきにすごせるようにとがんばってくれています。でも私はふと、かれらがわたしをどうみているのだろうかとかんがえます。わたしはただかれらにめいわくをかけているだけの、なにもできない無力な人間ではないのだろうかとおもいます。なぜなら、私は彼らになにもできることがないからです。

ところが、あるとき、ある人が私にいいました。「あなたはなにもできないとおもっているんですね。いきるかちをみいだせないんですね。痛(いた)みに耐(た)えるだけの日々とうんざりしているんですね。でもあなたは知らないのです。何のために人間が活着ているのかを・・・本当のいきることの意味(いみ)を・・・人間の真の存在価値(そんざいかち)がなにかを・・・あなたは今、アッラーを讃(たた)える力がありますね。あなたは今アッラーにかんしゃできる心をおもちですね。あなたはいつもアッラーを讃え、アッラーにかんしゃしているではありませんか。それこそが人間のこの世に存在する真の価値です。どうか、痛みに耐え、アッラーを讃え、アッラーにかんしゃして、死ぬまでいきぬいてください。木や草や花たち、そうです、万物がアッラーを讃えています、あなたもかれらのなかまにおはいなさい。」

こどもたちよ、まさにそのとおりです。苦しい時でも、悲しい時でも、はたまた、うれしいときでも、しあわせにかんじるときでも、そして、びょうきでみうごきのとれない今のわたしのようなものでも、人がアッラーをしんじる心をもち、アッラーを讃え、今の状態(じょうたい)をアッラーに心からかんしゃするならば、それこそが人が真のいきることなのですよ。そうすれば人はいきる存在価値をみいだせるのです。どうかこどもたちよ、あなたがたもアッラーをたたえ、アッラーにかんしゃする人間になってください。

アブーフライラによるとアッラーのみ使いは『アッラーに讃えあれと日に100回唱える者は、たとえ、その過ちが海の泡のように多くとも、取り消される』とおっしゃられた。(ハディース、ブハーリーより)



The Language of Colours

色の言語

今月号のテーマは春です。春になると自然界で花が咲き、多くの動物が冬眠から目を覚まし始めます。冬の間は色が少ない自然がカラフルに変身をします。そこで、今月は色について考えていただきたいと思いました。

色は環境の意味をなすことにおいて、人々にとって重要であるのと同様に他の生きている生き物が生き残るためにも不可欠です。

生き物は光に従って働く「色の言語」を認識するシステムを持っています。異なった色がすべての生き物にとって異なった意味を持ちます。生き残るために、全ての生き物は色の意味を知らなくてはなりません。

それでは、生き物はどのようにこの色の言語を使うのでしょうか？

最初に、大多数の生きている生き物が食物を見いだすために色を必要とします。次に、皮膚、うろこと毛皮の色は熱をどの程度吸収するか、あるいは放散するかの特徴を持つために生活の連続性における重要な役割を演じます。更に、生き物は自身を敵から守るために自身の色を変化させます。生き物が生存している環境で調和が取れている色に起因して、生き物たちは自分自身をカモフラージュして、敵から隠れることができます。

色はまた交配相手やひな鳥を識別するために役立ちます。例えば、母鳥は自分のひな鳥をじっと見つめ、その色によってひな鳥が食物を必要としているかどうか理解します。同様に、ひよこは自然にこのようにして自分の母を認識して、そして食物が届けられます。生き物は生命を存続させるために色の意味を知る必要があります。正確にこの知識を達成するために、彼らは色の認識の適切なシステムを所有する必要があります。

もし彼らがこれらのシステムを持っていなかったなら、環境の中で生き延びることは出来なideでしょう。食物を識別することも出来ず、敵を識別することも出来なideでしょう。

確かに、誰もがこのような洗練されたシステムが偶然の一致によって存在するようになったと主張することができません。すべてのシステム、すべてのハーモニー、すべてのデザイン、すべてのプログラム、すべての計画、すべてのバランスがデザイナーによって作られなくてはなりません。この力の所有者は力に限りのない唯一の神アッラーです。

聖クルアーンの創造者章(ファーティル章)の27-28節では以下のように色について語られています。

「あなたがたは見ないのか。アッラーは天から雨を降らせられる。それでわれは、色とりどりの果物を実らせる。また山々には、白や赤の縞があり、その外多くの色合いをもち、真黒いところもある。

また人間も鳥獣家畜も、異色とりどりである。アッラーのしもべの中で知識のある者だけがかれを畏れる。本当にアッラーは偉力ならびなく寛容であられる。」



ドゥア（祈り）のある毎日へ

^{ほま} 誉れたかく、^く 真の美の所有者よ

^{いだい} 偉大で^{しこう} 至高なるお方よ

^{かんぺき} 力と完璧さの持ち主よ

^{せいさん} 清算に^{じんそく} 迅速であられるお方よ

^{さだ} 定め（^{うんめい} 運命）の^{もとちよう} 元帳を^{たずさ} 携えるお方よ

^{まこと} 真の^{おうけん} 王権と^{いだい} 偉大さの持ち主よ

^せ 責め^く 苦の^{かこく} 過酷なお方よ

^{ばら} 罰に^{きび} 厳しいお方よ

最も良い^{ほうしょう} 報奨を^{たま} 給われるお方よ

^{おし} 重い^{あまぐも} 雨雲を^{つく} 創られるお方よ

あなたの栄光に讃えあれ、あなたのほかに安全なる信頼にたる神は存在しません。

私たちが（地獄の）炎からお助け下さい。^{viii}

^{viii}偉大なる鎖帷子（ジャウシヤヌルカビール）より



預言者たちの風格：第1回

1. 正直であること

正直であることは預言者であることの印である。預言者としての任務は、正直さの軌道に沿って行なわれる。預言者たちの口から出る言葉は、全て正しいと認められる。なぜなら彼らは、真実に対抗するようなことを語ったりしない。聖クルアーンでは、預言者たちの偉大性についての説明で、彼らの特性の一つであるこの点についても触れている。

「またこの経典の中で、イブラーヒームの物語を述べよ。本当に彼は正直者であり預言者であった」(マルヤム章19/41)

つまり「あなたはあの偉大な預言者であるイブラーヒームについて聖クルアーンの中で思い出さない、彼は言動も振る舞いもまさに正直な預言者であった」

「またイスマーイールのことをこの経典の中で述べよ。本当に彼は約束したことに忠実で、使徒であり預言者であった」(マルヤム章19/54)

「またイドリースのことをこの経典の中で述べよ。彼は正直な人物であり預言者であった。そしてわれは彼を高い地位に上げた」(マルヤム章19/56～57)

「彼は牢獄に来て言った。「ユースフよ、誠実な人よ、」」(ユースフ章12/46)

彼らはなぜ、正直でないことがあり得ようか。アッラーは、普通の人間でさえ、正直であることを望まれる。そして聖クルアーンでも、正直である者を誉めておられるのである。

「あなた方信仰する者たちよ、アッラーを畏れ、誠実な者と一緒にいなさい」(悔悟章9/119)

「本当に信者とは、一途にアッラーとその使徒を信じる者たちのことで、疑いを持つことなく、アッラーのために、財産と生命とを捧げて奮闘努力する者である。これらの者こそ真の信者である」(部屋章15)



人間と世界の本質（第2回）

第8のことば【預言者イブラーヒームに啓示された本にある話を通じて人間と世界の本質を説明する】

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
 اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ الْحَيُّ الْقَيُّومُ
 إِنَّ الدِّينَ عِنْدَ اللَّهِ الْإِسْلَامُ

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

「アッラー、かれの他に神はなく、永生に自存される御方」

「本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム（主の意思に服従、帰依すること）である」^{みもと} ****

このたとえ話に秘められた真実を理解したのであれば、教え、世界、人、そして信心をそれに当てはめることができるだろう。ポンチとなる部分を私が説明しよう。細かい部分は自分自身で考えて見なさい。

- ・ この二人の兄弟とは、一人が信者の魂であり、よい心である。もう一方は信じない者の魂であり、アッラーの命令を聞き入れない心である。
- ・ 二つの道の一つ、右側はクルアーンと信仰の道であり、左側は不信仰、神に対して恩知らずであることの道である。
- ・ 道の途中にあった庭園とは人間社会である。かつ、その文化の中に現れては消える社会生活である。その中にはいいこともあれば悪いこともあり、綺麗なものもあれば汚いものもある。利口な者は「綺麗で混じりけのないものを選び、不純でにごったものは残しなさい」という法に基づいて行動し、心の平安のうちにそこを過ぎる。
- ・ 砂漠とはこの世界である。
- ・ ライオンは死と寿命である。

*** 聖クルアーン イムラーン家（アーリ・イムラーン）章3/19より

- ・ 井戸は人の肉体であり、生きる時間である。
- ・ 60メートルの深さとは、平均的な人の寿命である60年を意味している。
- ・ そこにあった木は、寿命であり、生を構成する要素を意味する。
- ・ 白と黒の二匹のねずみは昼と夜である。
- ・ 怪物は、墓を入り口とし、死後魂の通過道を意味している。しかし信じるものにとってそれはこの世という監獄から庭園へ抜ける扉である。
- ・ 害虫たちは、この世における災いを意味している。しかし信者にとっては、のんきさに溺れてしまわないための神の警告であり、慈悲深い神の好意である。
- ・ そして、木に実っている果実は、この世における恵みである。慈悲深く気前のよい神はこれらを天国における恵みのリストとして、同時に準備として、天国の果実の客達を招く見本として作られた。
- ・ この木が一本であるにも関わらず様々な種類の果実を実らせることは、神の力のしるし、神が全てを創造され、それぞれに与えられた役割を完全に果たさせられることのしるし、そして唯一従い敬われるにふさわしい神の壮麗さのしるしである。なぜなら「一つだけのものから全てを作り出す」。すなわち、大地からあらゆる種類の植物、果実を創造すること、一滴の水から全ての動物を作られること、食べ物から生き物達の臓器を作られること、それと共に「全てのものを一つにする」。すなわち、その生き物が食べた無数の種類の食べ物が皆その動物の肉となること、皮膚になること、これらは唯一であり、全てのものによって必要とされ、かつ御自身は何ものをも必要とされないお方、始まりも終わりもない支配者のしるしである。特別のしるしである。一つのものから全てを作られ、また全てのもの一つにされるということは、全能なる創造主にしかあり得ないことなのだ。
- ・ 秘められた力とは信仰の神秘であり、創造の神意の秘密である。
- ・ 鍵とは、**اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ، يَا اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ** 「アッラーよ、あなたの他に神はない」、「アッラー、かれの他に神はなく、永生に自存される御方」という名文句である。
- ・ あの怪物の鍵が庭園への扉に変わったことは、次のことを意味している。すなわち、墓というものが信じようとしなない人々にとって孤独と忘却の中にあり監獄のように苦しく、怪物の腹のような狭いところにつながる入り口であるにもかかわらず、信じる人々にとってはこの世という監獄から永遠なる庭園へ、試練の場から天国の庭へ、この世の苦勞から神の慈愛へとつながる扉なのである。
- ・ そして、あのライオンが親しげな召使いに変わった、忠実な馬になったことは、次のことを意味している。すなわち、死は、信仰を持たない人にとって愛する全てのものとの永遠の別離であり、見せ掛けだけの天国から孤独で辛い墓場という監獄に移され、閉じ込められることである。しかし信仰を持つ人にとって死は、あの世に去って行った昔の友や愛する人々と再開する手段なのだ。さらには、真の祖国へ、永遠の幸福の地に行く手段でもある。この世の監獄からあの世の庭園への招待状である。慈

悲深い神の恵みによって、それまでの行ためにふさわしい報奨を受け取る場でもある。生という困難な任務からの退役でもある。試練からの休息でもある。

要約

誰であれ、このはかない生を目標にしてしまったならば、一見天国にいるように見えたとしても、精神的には地獄にいるのである。そして誰であれ永遠の生に真剣に向き直ったら、この世とあの世、二つの世界における幸福に達成したということなのだ。この世においてどれほど苦しみの中にいたとしても、この世を天国への待合室とみなし、それによって心地よくみなし、忍耐し、忍耐のうちの感謝するのである。

بَعَدَدِ جَمِيعِ الْحُرُوفَاتِ الْمُتَشَكِّلَةِ فِي جَمِيعِ الْكَلِمَاتِ الْمُتَمَثِّلَةِ بِأَذْنِ الرَّحْمَنِ فِي مَرَايَا
تَمَوْجَاتِ الْهَوَاءِ عِنْدَ قِرَاءَةِ كُلِّ كَلِمَةٍ مِنَ الْقُرْآنِ مِنْ كُلِّ قَارِءٍ مِنْ أَوَّلِ النُّزُولِ إِلَى آخِرِ
الزَّمَانِ وَارْحَمْنَا وَالدِّينَا وَارْحَمِ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ بَعْدَ دَهَائِهَا بِرَحْمَتِكَ يَا أَرْحَمَ الرَّاحِمِينَ
آمِينَ وَالْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ

「アッラーよ、我々を、幸運な、許された、クルアーンと信仰の民にしてください。アーミーーン。

「アッラーよ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とその家族、教友たちに、クルアーンが啓示されてから今までクルアーンを読んだ全ての人々の一語一語、慈悲深い神の御赦しによって顕示された一つ一つの句の、全ての文字の数だけ、祈りと平安がありますように。また、その数だけ、我々に、母に、父に、男女全ての信仰するものたちに、その慈愛を以って慈悲をお与えください、慈悲深い上にも慈悲深いお方よ。アーミーーン」

「全世界の神アッラーに感謝いたします」^{xiv}

^{xiv} お祈り



新しいお稽古事から学んだ「動作の意味を押し量る事」の大切さ

春という季節は何事においても新しいことをはじめやすい時期です。寒い冬が終わって気持ちも緩むから心にも余裕が出来るのか、はたまた年度の始まりだから何かはじめてみたくなるのか…。新年（元旦）も改まった気分になるのですが、私の場合新年に「よし！やるぞ！」と思うことは大体抽象的なことばかり。ですが春に思う事は具体的に何か行動する事が多いのです。

そんな私が今年の春から新たに始めたのは、お茶です。抹茶はおいしく、お菓子が食べられるのも魅力で大変気に入ったのですが、始める前は「足がしびれる」「窮屈、堅苦しい」「礼儀作法が色々複雑で面倒くさい」などと聞いていました。確かに、茶の湯の世界には作法がたくさんありました。先生へのご挨拶からはじまり、畳の歩き方、礼の仕方など、姉弟子たちが簡単にやっていることが私にとっては焦りの連続でした。「挨拶をするときに必ず扇子を前に置いてね」と言われても、慣れないのであわててしまい扇子の左右がわからなかったり、「茶室には左足から入って右足から出てね」と言われては歩数が合わずに最後の一步がやたら大きくなってしまったり…。一挙手一投足にも気を使います。逆に、普段きちんと座ったり礼を尽くしたりする機会が無いせいか、「異世界」が心地よく感じられもしています。しん、とした茶室でしゅんしゅんと沸く茶釜の音、床の間の書、生け花、そしてお香の匂いや着物の色や柄あわせなど、その場に居るとお茶が「総合芸術」といわれるのもわかる気がします。良いといわれるもの

が良いのではなく、全体のバランスを大事にしてシンプルな美しさを追求していく—そんな「芸」であるように思えました。

さて、お稽古の事に話を戻しましょう。私は始めたばかりですので、他のお弟子さんがお茶を点てたり運んだりする練習の客役です。今は周囲を観察しながら必死に動作を真似し、どうにかついていっているといったところです。自分で言うのも難ですが、「見て学ぶ」のはとても大切な事だと思います。よく見ている事で自分が何かするときに応用できますし、なによりも行動の意味を推測する事ができます。推測した事柄が正しいのかどうかはわかりませんが、行動や動作の意味を押し量る事、これは何かを習う上で一番重要なことのように思えます。と、いうのもお茶を点てる時や飲む時の動作には、「そうやってやるように決まっているから」という様式である以上に、まず何らかの意味があるのではないのでしょうか。意味を考えずにただある動作を行うとなると、体がうまくついていきません。外から見ても、ただ決まった事をやっているだけのように見えてしまいます。ルールを意識して一つ一つの動作をきっちりこなしている分、ごちなく見えてしまうのです。逆に、動作の意味がわかってやっている人は体が動きと一体となっていて、たとえ少し間違えたとしても危なげなくスマートに見えます。うまい例があげられないので少しわかりづらいかもしれませんが、容赦ない観察の結果、「意味を踏まえて行動を行えば、体はきちんとついてくる」というよう

なことが少し見えた気がしました。これはお茶だけでないのでしょうか。例えば大きいところで言うと、「生きている事」に対しても、意味を推測し考えていくとそれに見合った行動が出てくる、そして意味を考えているゆえに体（動作）も行動についてくる……あまりに能天気を考えすぎかもしれませんが、同様に他の様々な物事にも意味を考える事の大切さという事は当てはまるのではないのでしょうか。

「お茶を習っています」と言った時、ただ単にお茶を点てたりいただいたりする時の規則や動作が表面的に出来るというだけではなく、各々の動作

の意味を踏まえてその動作が出来るようになりたい、と思いました。気の長い話ですが、そのようになるためにはやはり日々の努力の積み重ねしかないのでしょうか。普段から居ずまいを正し、人に対する礼や心遣いを忘れずにいれば、お茶の規則はさほど難しいものではないようです。日々の生活できちんとする事を心がけるのは、簡単なようで難しいけれども、さほど多く無い努力で「異世界」と思ったものが実は自分の普段の生活と密接に関わっていくことで自分のものになる——新しい世界を知り、「お稽古事」の深淵を見た気がした今年の春でした。



レシピコーナー

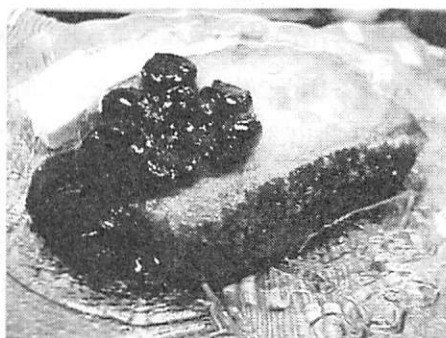
ユムルタル・エキメッキ（卵揚げパン）

材料

パン 4～5切れ

卵 3個

揚げ油 適量



作り方

1. 卵を混ぜて、卵をパンに1個ずつまぶして油で揚げます。
2. パンに焼き色がついたら油を切って出来あがりです。
3. お好みのジャムで食べます。



(第2回)

第二の考え方：自分で誕生することの不可能さ

有る物が自分で誕生できるためには、その全体の一部・一部が全体の構造の中で従わなければならない法則を知る必要がある。例えば、一部・一部が、全体のどこの部分になっていけばいいかを、お互いに連絡し合ったりして、あるべきところになれば全体が成り立たないのだ。例えば、人間の体は、変化のない簡単な物ではなく、逆にいつも変化し続けている。

毎秒、ある細胞グループが減ぼされて、新しいのが作られている。私達の体の中の元素さえ、いつもある目的で働いているのだ。人間の体は宇宙とも深く関係を持っている。例えば、人間の体にかかる引力の法則と太陽の光により体に入る食べ物と、その食べ物の消化との関係もあるし、人間ではない種類の生き物とも、染色体の数も違うし、他の人間と、いろいろな能力も、夢も違うのだ。

このような人間の体内で働いている微粒分子も、その関係を壊さないように注意しなければならない。まるで、人間の体にある微粒分子は、宇宙のことも、人間のことも全てを知って、それに基づいて行動をしているようだ。なぜならば、一個の微粒分子も何かを間違えたら必ず何らかの混乱が起るわけだからだ。もし人間の体の中で働いている微粒分子が全て、全知全能の唯一なる神の命令に服従して行動していないとすれば、微粒分子一個一個は人間の体のことにも、人間の体と宇宙

の関係にも詳しい知識を持たなければならない。

人間の体の全ても、人間の体と関係のある宇宙の部分の全ても、見られる視力も、持たなければならないし、人間の体に入る食べ物の特徴も、全てを知るぐらいの、人間の百倍以上の頭脳的な力も無ければならないだろう。我々の技術はこの位進歩しても、分からない微妙な部分がある。このような細かいことの全てを、頭脳的な力のない微粒分子に分かるはずがないだろう。

だから、全てを知っているのは、つまり全知全能なのは、微粒分子ではなくて、唯一なる神であるはずだ。

しかも、それらの元素は、1つの体にだけではなく、全ての生きているものの体内で働いているわけであって、ある生きものの体は、他と全然違う組織体を持っている。例えば、イチジクとザクロを考えれば、全然違う別々の工場のようなだろう。もしも、全ての微粒分子は全知全能の唯一なる神によって制御されないとしたら、全ての微粒分子が全知全能でなければならないし、全てを見ることが出来る視力も持たなければならないことになる。前の方でも言ったように微粒分子は地球の全ての植物や動物の体で規則的に働いていて、ある所で規則的に働くために、そこの原則を知らなければならぬのだから、全ての微粒分子は植物学、動物学、生理学、解剖学のことをよく知らなければ

ばならない。なぜならば、もし知らなかったとしたら、全然間違えないでできるはずがないのだから。しかし、全てのことは間違えずに微粒分子によって作られている。

微粒分子が全てのことを知っているとしてもどうしてそんなに知識を持っているのに、目や頭脳のような所にだけでなく、足元や爪先にもあるのかは説明できない。全ての知識を持っている微粒分子が全部、目や、頭脳だけで働きたくなって、普通はそれによって、秩序がなくなる筈だ。軍隊でも必ず一番上の階級が軍隊を管理するのだ。一番上の階級が無いことには、頭のすばらしい人間を集めた軍隊を作ることができないのではないだろうか。

そのため、微粒分子が全知全能の唯一なる神によって制御されることは明らかである。

我々の体はとても素晴らしい組織体を持っている。しかも、人間の体の組織体は新陳代謝して構造変化していく。我々が持っている素晴らしいものである精神や、頭脳的な能力や感覚の多様性などは別としても、体の中にあるいろいろな器官はそれぞれ、素晴らしい組織体を持っている。元素はその素晴らしい組織体を成す小さな単位であって、お互いに調和し合って、助け合っているととても素晴らしい作品だ。目や舌のような全知全能なものにしかできないような奇跡として作られている。もしも、これらの元素は全知全能の唯一なる神によって制御されないとすると、各々の微粒分子が他の微粒分子を管理しながらも、他の微粒分子の命令を聞いて、しかもそれらと平等であるというように色々な面で不可能なことが生じる。微粒分子が体の中で、どういう計画によって働くのだろうか・その計画を立てるのは一体誰なのだろう

うか・例えばリンは頭脳と目のどこに行くべきかと言うことを知ることができたとしても、それを他の微粒分子にどうやって言えるかとか・その上、そのリンの元素も他の各々の微粒分子の命令を聞かないと、体のバランスが崩れてしまう等、というような色々な面で不可能が生じるのではないだろうか。また、微粒分子が自分で対称的である人間の体の器官の間のバランスをどうやって保てるのかというのも説明できない。

また、人間の体というのは宇宙のミニアチュールでもあって、人間の体を成す微粒分子が宇宙の全てのことも知らなければならない。つまり、各々の微粒分子が全知全能であって、まるで神でなければならぬというような疑問も起こる。これがどれ位、不可能なことなのか自然科学の有名な科学者である Jorjeiril は、こういう風に説明している：「宇宙が自分で自分を創造したとすれば、全知全能になるのだから、神になるはずなのだ。しかし、この自然という神はただ、物質の集まりにすぎない。物質を創造した物質の一部ではない全知全能の唯一なる神を信じたいのだ。全知全能の唯一なる神が全てを治めているのに、自然という物質の神を信じるのは滑稽なのだ。

c) 物質というのは秩序よりも無秩序に傾むく。つまり自分で秩序を持つようになれない。(無秩序というのは、自動的にもできるのだ。けれども秩序は創造者がいないことには成し得ないのだ。)例えば、水はある器の中に入れないと、きちんとした形を持つはずはない。物質はある方向に向けられると、意識的にその方向に向かう。Prof. C.Cothers も言ったとおりに物質の世界には、無秩序的なことはなくて、何でもきちんとした法則があるのだ。頭脳的な能力も計画する能力も持っていない物質が、偶発的に自分で自分を創造できる

なんて、頭脳のある人が考えることではない。それができたとしても、物質がお互いに命令しながらもお互いの言うことに従えるのかという疑問も起こる。

一つの細胞を考えてみよう。一つの細胞は血漿や核などから成っている、生きていて素晴らしい組織体であって、DNAやRNAを含めて素晴らしい作品だ。細胞も結局微粒分子から成っているから全知全能の唯一なる神によって創造されなかったとすれば、微粒分子が何らかの役割を果たすために、前から立てられた素晴らしい計画が必要だ。沢山の繊維組織や器官のお互いとの関係からも考えてみると、どれぐらい沢山の計画が必要だか分かるだろう。細胞分裂と増加は連続的に続いているから、立てられた筈の計画の数も天文学的に増えることになる。つまり、ある細胞が分裂しているとき、新しい二つの細胞のための計画を最初の細胞が造るのか、それとも外側から立てられて送られるのか、という疑問が生まれる。自分だけでは生きていくことができない細胞や、繊維組織や器官が自分のために必要となる計画を全て自分で造り上げるのは不可能なのだし、新しい細胞や繊維組織や器官が作られているとき、体の外から、計画が立てられ、体の中に送られるとも考えられない。人間の身体の器官が、手・足・目・耳・心臓・頭脳というふうに全然別々の役割を果たす

ように作り上げられていることも素晴らしいことだ。

例えばワープロの前に座っている一匹の猿が、何か意味のない言葉を書けるだろうが、詩や、文学的な小説などは書けないだろう。

猿が、シェークスピアがハムレットに言わせた”to be or not to be, that is main problem” という文を書ける可能性は、Jole 大学の Dr. William Bennet によって計算された。彼は、「十の二十四乗匹の猿が、一匹ずつ、十の二十四台のワープロの前に座って、宇宙の寿命の約一億億倍の時間で、ずっと書けば、一匹の猿が一回だけこうした文を書けるだろうと思う。」という。

それで、人間の体という素晴らしい作品を考えてみよう。何世紀も前から、今まで科学者は、この作品についての疑問を全部解決していない。それなのに、この素晴らしい作品が作られたと言うことに、唯一なる神を考えると驚かずにいられなかった。

人間の身体の細胞は連続的に増殖し、新生している。毎秒、七億二千万回の新生が起こっている。これが偶発的に起こってくる筈がないから、全知全能の唯一なる神によって起こされているはずだ。





ウドゥーをやる時に「これからウドゥーをやる」という意志を言葉または考えで表明することがファルド（義務）かどうかは学派によって異なることがあります。ハナフィー派にとってウドゥーはサラート（礼拝）の数多くの必要条件の一つであり、ウドゥーだけでは礼拝の一部ではないと説明しています。従ってサラートの準備であるウドゥーのための意志表明がファルド（義務）であるとは認めていません。他の学派はウドゥーも礼拝の一部であると考えて、それに「あらゆる行いの意味は意志によって決まる」という内容のハディースも考えるとウドゥーはファルドであると説明しています。このように説明している人たちはハディースにある「行い」という言葉の意味を「礼拝」という意味で捉えていると考えられます。ハナフィー派においてウドゥーは、体の見えてはいけない部分を覆うことやマッカに向かうことや時間をきちんと守ることのように礼拝の条件であると考えてられています。ですから、これらの必要条件を満たすときに意志表明が必要ではないようにウドゥーの時も必要でないと考えられるのです。この簡単な解説をする目的は、ウドゥーが一種のサラートであってもサラートを行う為のものであっても、ウドゥーはイスラームの最も大切なサラートの準備段階であることを示すことです。サラートは特別な準備段階を持つことを考えますと、ほかの崇拜行為も準備の段階はあるはずだと頭に浮かびます。

これからいくつかの種類の崇拜行為の準備について説明していきますが、これらのことを考えると準備段階はサラートだけにあるものではないと分かります。

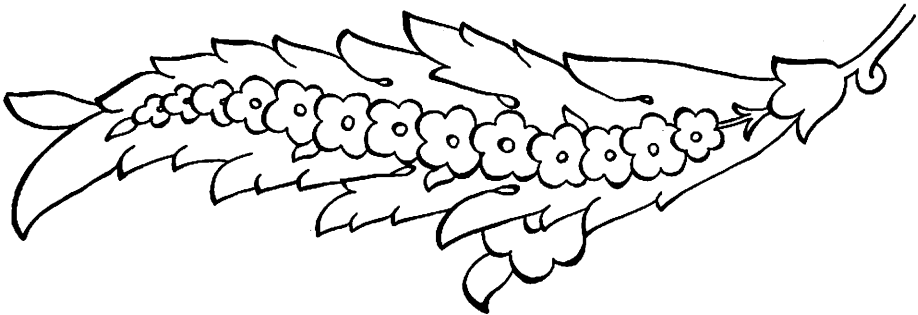
最初に説明したのはサラートに関したことでしたので最初はサラートの例を挙げたいと思います： 綺麗にウドゥーをして、スナナのサラートを終え、みんなと一緒に「アッラーは偉大なり」と言い集団でサラートを始めることは神聖なサラートを行うために役に立ちます。それにこれらの準備がきちんと行われればサラートもきちんとしたサラートになります。ウドゥーをはじめ色々な準備が注意深く行われるとそれはサラートにも影響を与えます。従ってサラートは綺麗なサラートになります。クルアーンを読むことに関しても同じことが言えるのです。読む前に特別にウドゥーをして、必要なら歯を磨いて、それから意味が分からなくても魂が安心できると信じて読むことは、全く準備がないときより効果が高いはずで

続いて巡礼を考えましょう。巡礼者は旅に出る前にまず親戚などを訪ねて「今までしていただいたことに感謝し、やってはいけなかったことに関して謝罪します」と言って許しなどを求めるのです。それは、巡礼という大事な礼拝を始める前に人間としての責任を全て果たしたような感じで巡礼を行いたいからだと思います。これはまさに巡礼の準備段階です。

最後に断食について考えましょう。断食の月であるラマダーンは2ヶ月も続く準備期間の後に来るので

す。聖なるいくつかの夜を有するラジャブとシャーバーンという月からなるこの準備期間の意味は一ヶ月の断食の練習と、精神的にラマダーンという「クルアーンとサラートの月・聖なる月」の準備をすることです。準備期間に注意深く行動すると、それは本番にとってもいい影響を与え効果が高くなるのです。準備というものを作ってくれたアッラーのおかげでまともな礼拝を行えるのです。これらの準備行動が本番に与える良い影響は基本的に目で確認できるようなものではありません。しかしその影響はなんらかの形で表に出ることがあります。たとえば準備を完全に行ってからサラートを始めた人を見るとサラートの義務である動きを注意深く綺麗に行っていることがわかります。それからラマダーンの準備期間であるラジャブとシャーバーンの月に礼拝をたっぷり行った人は、ラマダーンを年に一回だけ訪ねてくれる聖なるお客さんとして迎え、せっかくだから真剣にラマダーンを活かすに違いありません。

大事な試合の前に選手たちは厳しい練習期間を過ごすのです。練習期間が効率よく行われれば結果も良い結果となるはずですが、効果の高い礼拝を行えるためにも特別な準備が必要だと思えます。これらの準備をきちんと行うことによって礼拝もきちんと行えるのです。このような練習と試合の関係と礼拝が似ているというのは少し失礼だと思われるかもしれませんが、全く準備なしで大事な礼拝を始めることのほうが礼拝に対して失礼ではないかと思えます。





民の心

私の心はあなたへの追慕で焼き焦がれる、

私の痛みを和らげ給うお方よ、さあ、いらせられよ！

私を癒し給うお方よ、再びあなたと共に、全世界の称讃を集め給うお方よ、いらせられよ！

光が消え始める時の万有の希望よ、どうか、いらせられよ！

薔薇の花が咲き、ナイチンゲールがさえずり、久しく時が過ぎ、

あたり一面夜明けの光に映し出された幻想が、私の心を満たす、

薔薇たちは深紅に変わり、水たちは流れ流れて澄み留まり、

まちわびたこの季節、鳥達が巣作りする季節に・・・さあ、いらせられよ、

(E. アイディン)



礼拝（サラート）第3回

5) 礼拝の仕方

1. ニーヤをする： この時、行う礼拝が義務なのかスンナなのか、また、どの礼拝を行うのかを意図する。例：「ズフルの義務の礼拝を行います」（アラビア語で「ウサリーー ファルダズフル」）。ニーヤはタクビーラトゥルイフラム（次項参照）と同時に行われなければならない。ニーヤのときに何ルクアの礼拝をするということを意図しないほうがいい（アッラーが下さる報奨の数を限定しないため）。

2. タクビーラトゥルイフラム： ニーヤと同時に行う。キブラの方角を向き立った状態で、両手を上げ、最低限自分自身に聞こえる声で「アッラーフアクバル」（意味：アッラーは偉大である）という。両手は親指を両耳に平行させ、手のひらをキブラの方へ向ける。

3. ウクーフ（起立）の姿勢

両手を胸の少し下におく。このとき左手の上に右手を置き、右手の指で左手首をつかむ。礼拝の時の目線はタシャッフドの時以外はサジダする場所に置く。

4. イフティターフッサラート

「諸天と大地を創造された方だけに私は顔を向けました。私は多神教徒ではありません。私の礼拝、宗教儀式、そして生も死も並ぶ者無き全世界の主、アッラーのものです。私はムスリムの一員であり、そのように命じられました。」というドゥアーを唱える。

「ワッジャハト ワジュヒー リッラズイー ファタラッサマーワーティ ワルアルダ ハニーファン
ワ マー アナーミナルムシュリキーン、インナ サラーティー ワ ヌスキー ワ マハヤーヤ ワ
ママーティー リッラーヒ ラッピルアーラミーン、ラー シャリーカ ラフ ワ ビザーリカ ウミ
ルトウ ワ アナー ミナルムスリミーン。」

・・・続きは次号に掲載します。



二人の者に対するみ使いの批評

ある人がみ使いと共に坐っているとき、一人の男が道を過ぎていった。み使いが同僚達に聞いた。

君達は、あの人をどう考えるか。彼らは答えた。

おおアッラーのみ使いよ！彼は良家の息子であります。アッラーによって申し上げます。かれはこんな人間です。

もし彼が良縁を求めている場合、最も有名な家柄の婦人の手で縁談を持ち込めば拒絶しないでしょう。またもしも彼が誰かを推薦すれば、だれでも彼の推薦なら受け入れるでしょう。それに対しみ使いは何も言わなかった。その後あるとき、その道を他の人が通った。み使いは、その人について同じ質問を同僚達にした。彼らは答えた。

おお、アッラーのみ使いよ！彼はたいへん貧乏なムスリムです。

もしも彼がどこかで婚約しても、結婚するに至り得ないでしょう。またもしも彼が誰かを推薦するようなことがあっても、その推薦は受け入れられるに至らないでしょう。また彼が話しても誰も聞かないでしょう。

そこでみ使いが注意して言った。

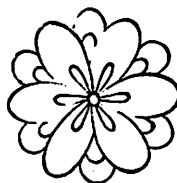
この人のほうが、前者のようなあの種の人の、全世界中の人よりも優れている。

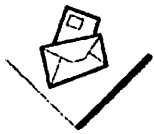
いわゆる良家に属するということは、アッラーにとっては価値ないことである。世俗から尊敬されまたもてはやされるが、アッラーの道からはおよそ遠い。いわゆる高貴の人の数百人よりも、一向に尊重されない貧弱なこの世では認められない、ムスリムの方がはるかにアッラーに近いのだ。(これは家柄を尊ぶ風潮に対する警告であった。)

ハディースにいわれている。

アッラーを賛美する一つの魂もないようになったときは、この世の終わりである。

この世の秩序が円満に運営されていくのは、アッラーの聖名によるからである。





「ムハンマド—イスラームの源流をたずねて」 by 小杉泰 を読んで

神の存在に気付いたのはもう10年も前のことですが、一度それに慣れてしまうと、信じていなかったころの自分が何を考えていたのか忘れることも多く、「私は信じない」と言っている人を目の前にしてアッラーや預言者、啓典などの話をするとなるとうまく説明できずにもどかしい思いをすることがあります。信じてると信じないの二つの立場の中間にたつて物事を見るのは私にとってとても難しいのですが、この本では前者でも後者でもなく、ムハンマドという一人の人物がもたらした思想や概念がもつ実体性がいかに人間社会の基本要素になっているかという立場をとって構成されています。人類史上のムハンマドという人物像、彼の及ぼした影響は何だったのか。それを異文化としてどう理解するのか。ムスリムの方もそうでない方もぜひ一度読まれることをお勧めします。以下抜粋

——ムハンマドは、もし唯一神が存在し、啓示が預言として示されるとしたら、そしてその受け手として預言者というものが存在するとしたら、それはこのようなものなのだ、ということを示した。これは非常に大きな思想的貢献であろう。

——「ムハンマドの体験を唯一神からの啓示だと思うか」という設問に戻るならば、「唯一神からの啓示」という概念そのものが、イスラームが確立し、世界に広めた概念であることを認識しなければならない。設問に対する答えはイエスでもノーでもよいが、イスラームが確立した概念によってはじめて、このような問題を考えることができるという点に、イスラームの貢献をみることができる。

——友情が現実だと思うのであれば、同じように、唯一神や預言者が現実でありうると考える必要がある。そうでなければ、いつまでたっても私達にとって、イスラーム世界は「ありえない幻想を共有している世界」ということになるであろう。

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404